

「全鍍連」 2016年 5月号 いきいき地域

情報・国際副委員長 山崎 慎介 (東新工業(株) 代表取締役)

「盲亀の浮木」

ゾウ、ギリシャ、エジプト、ビルマ、ロシア、ホシ、ホウシャ、クモノス、アカアシ、キアシ、ケズメ、パンケーキ……何の名前もお解りでしょうか？お解りの方はかなりの爬虫類好き！しかもかなりのカメラマニアな方々です。そう！名前は全て……リクガメの種類の名前なのです。

この度、全鍍連誌の執筆の機会を頂戴しましたので、メッキ業界にも是非ともカメラマニア、言わばカメラーを増殖したく、小生の趣味であるリクガメの魅力について書かせて頂きます。皆さんはカメと言うと、縁日で買ったミドリガメやゼニガメ、水族館で見るウミガメを思い浮かべるのではないのでしょうか？

男の子なら小さいころに一度や二度はゼニガメやミドリガメと言った水棲のカメを飼ったことがあるのではないのでしょうか。大半の方のカメのイメージは、「臭い」、「水替えが大変」、「小さい時は可愛いけど大きくなって暴れる」、飼いきれないとネガティブなものではないのでしょうか。

「リクガメってなに？」「カメが陸に居るの？」「カメは水の中に居るんじゃないの？」、と思われる方も多いでしょうが、昨今ではリクガメも、テレビやちょっとしたペットショップで目にすることも多くなりました。

リクガメは本来、サバンナや砂漠、熱帯雨林に生息し、草や果物を食べて生きる、まだまだ馴染みの少ないながら、我々と同じ地上に生活するカメたちのことで、ペットとしての歴史はまだまだ浅い素晴らしいカメたちの総称です。

私がリクガメと初めて出会ったのは今から約 30 数年……、当時は珍しいリクガメ専門店が横浜に出来たことからでした。リクガメの特徴として、黒目勝ちの優しい目、決して他者と争わず、縄張り争いもせず、自分からは攻撃出来ない、完全草食性の穏やかな性質であり、更に一頭、そして一頭一頭違う自然の芸術としか思えない高くドーム状に盛り上がった綺麗な模様の甲羅……、私はひと目見た時からリクガメの虜となってしまいました。

子供のころからカメ好きで、ゼニガメやらミドリガメを飼ってはいいたものの、リクガメの飼育の難しさをペットショップのオーナーに聞くにつけ、そして今から 30 数年前に数十万円～数百万の高価格も忘れ、南米生まれのアカアシリクガメの「リッキー」を手に入れたことが、リクガメマニア、ハードカメラーの道へ入るきっかけとなりました。

リクガメは、蒸れないような背の低いランチュウ水槽を用意し、人工的に紫外線を発するライト、爬虫類であり恒温動物である彼らは自分で体温調節が出来ない為、ホットスポットを作るためのライト、シェルター、床暖マット、タイマーやら温度、空中湿度センサー、更には各種栄養剤を買い揃え、温度、湿度を常に管理し、餌の種類や環境の変化と言った、あらゆることに気を遣ってやらないとあっさり死んでしまいます。

ある意味、ビジネスにも通じるし、会社や社員を守ることに通じます。穏やかに悠久の時を生きる彼らは、何よりも癒しの心を持ち、生殺与奪の権利を全て、人間に委ねたカメたちには、心から快適に天寿を全うさせてあげたい、不思議な魅力を持った生き物なのです。

因みに「鶴は千年、亀は万年」と言いますが、リクガメの寿命はガラパゴスに居るようなゾウガメで 100 年以上、小さなリクガメでも 20 年以上は生きています。始めに手に入れたアカアシリクガメのリッキーは、一昨年、推定 30 年、我が家に来て 26 年の天寿を全うしました。昔はレアなリクガメ、高価なリクガメを買い漁り、一時期は 40 頭近く、趣味と言うよりコレクションのように育て、ブリーディング（繁殖）もしていましたが、忙しくなってしまったことで、マニアの方々に里親に出し、今は年老いた古参のカメたち（ビルマホシガメ、パンケーキリクガメ）の天寿を全うさせるべく…と言うより、大切な宝物として癒されながら育てています。

どなたかメッキ業界でカメ好きな方、リクガメを飼いたい方はご連絡下さい。私の夢はいつの日か遠い遠い…、ガラパゴスとマダガスカルで野生のリクガメを見ることを目標に頑張ります。

本来は弊社の中国工場の状況、中国の今を寄稿出来れば良かったのですが、書いてはいけないことまで書いてしまうと色々問題があり、私の趣味、宝物自慢をしてしまったことお許し下されば幸いです。誌面では書けない、報道されない今の中国実態等、包み隠さずお話し致しますので、ご興味のおありの方は併せてご連絡下さい。

（東新工業株式会社代表取締役）